

## 『労働戦線』の創刊と編集事情(3・完)

松尾洋・佐藤茂久次氏に聞く

はじめに

- 1 産別会議への就職
- 2 『労働戦線』の創刊(第493号)
- 3 編集・経営事情(第515号)
- 4 後退期の『労働戦線』(本号)

### 4 後退期の『労働戦線』

#### 組織後退の原因

次に、産別会議の後退期における『労働戦線』の編集事情と、『労働新聞』『労働者』への改題についてお尋ねします。その前に、佐藤さんが産別会議に復職されたのは1949年ということでしたね。

**佐藤** そうです。私は1948年6月、昭和電工事件で政界が緊迫していたときに結核を患い、翌月から休職しました。そして、9か月間療養したのち、翌年4月に復帰しました。

この間、産別会議は1948年11月19日、第4回定期大会で「民同は解散すべし」との決議を行い、この結果、組織は分裂し、細谷松太、三戸信人らいわゆる民同グループが新産別結成へと動くわけです。産別会議が運動路線をめぐる内部分裂し、動揺を来した時期に私は復職したわけです。

私が休職している間、1949年1月に総選挙が

あり、日本共産党が大きく躍進し、代議士の数が4名から35名となりました。翌2月に民自党の吉田茂内閣(第3次)が成立し、日本社会党の政権与党の時代は終わりました。

他方で、日本共産党の方は議席の増加とは反対に、むしろこの時点から後退を加速させていきました。私は、あれは共産党が統一戦線の思想も政策も持ちあわせていなかったことを如実に示していると思うのです。

何のことですか。

**佐藤** いわゆる社共同運動のことです。あれは、民主勢力の統一や労働者・農民の統一論とは無縁のものだったと思います。共産党は総選挙が終わった後、社会党員や日農の組合員、さらに非共産党系の学者・知識人に対して集団入党を呼びかけました。他方で、徳球(徳田球一)や野坂参三らが「9月革命」説などを言い出す始末です。

当時、日本社会党に対する共産党の批判に尋常でないものがありました。あれは、社会党に対する排撃運動ですよ。あの社共同運動の戦

術は、長谷川浩とか伊藤律が音頭をとってすすめたのですよね。

そうらしい。

**佐藤** 長谷川浩にしる伊藤律にしる、二人は徳球に非常に可愛がられていました。また二人は、徳球についていつも「親父さんは」とか、「親父さんがね」とか枕詞を使って自らの言動に権威をもたせておりました。長谷川は、徳田や野坂を第一世代の幹部とすれば第二世代の幹部なんです。彼は、戦前から活動歴があるらしく、労対幹部として私らを指導していたけれども、指導にもう一つ信頼がなく、言動にも一貫性がなかったのです。

伊藤律についても当時、戦時中のことを含め、よろしくない風聞が私らの耳にも入ってきていました。伊藤は1949年当時、党のスポークスマンのような存在だったのです。伊藤は演説のさい、あるいは党としての談話や声明を発表するさい、野坂参三の口真似や身振りて話をしている、私はキザな奴だなあと感じておりました。長谷川も伊藤も第一高等学校、東京帝大を出ていて...

いや、伊藤律は昭和6年、卒業まぎわに共青の運動で第一高等学校を放校されています。

**佐藤** 長谷川も伊藤も頭がきれたかもしれない。しかし、必ずしも党員の信望や信任のうえに幹部として存在していたのではないと思いますよ。二人は徳球をバックにしていたからこそ力をもち得たのです。

産別会議が日本の労働組合の中心にあり、期待されながら2、3年のうちに没落したのは米日支配権力の弾圧だけじゃなかったと思います。日本共産党の指導の誤り、このことが決定的であったと思います。極論だと言われるかもしれないが、日本共産党も産別会議も自壊したのです。当時、共産党に統一戦線の思想や政策

は無かったのです。

**松尾** 伊藤律について、こんなエピソードがありました。民同が結成される前、1948年1月から2月に、私が北海道へ長期の取材に行く前ですが、党本部で水曜会の会合がありました。伊藤が、全通争議か東宝争議の対策だったか忘れてたけれども、とにかく偉ぶった演説を行ったのです。すると三戸信人がいきなり立ち上がって、大声で「俺は鵬翼の歌を作らなかったぞ。空襲のとき阿弥陀像をかついで逃げたりしなかったぞっ」と彼を怒鳴りつけたのです。

いまの話どういうことですか？

**松尾** 伊藤律がゾルゲ事件で起訴され、豊多摩刑務所だったかで服役中に「鵬翼の歌」という戦意高揚の歌詞を作って表彰されたいらしい。また豊多摩刑務所が終戦前に空襲を受けたとき、伊藤は所内に置かれた阿弥陀如来像をかついで、真っ先に逃げたというじゃないですか（笑）。

模範囚だったのですね。

**松尾** とにかく、日本共産党の労対の幹部といっても、彼らが産別会議の事務局に来るときは構えていたのです。伊藤はとくに事務局のなかでは不評で、三戸信人や斎藤一郎に頭が上がり、会うのを避けていたのです。

**佐藤** まあ、共産党員は玉石混交で、ニセモノもホンモノもありました。幹部であれ書記であれ、一般化はできないが、傾向としては立身出世主義者が多かったように思います。ハッキリと幅をきかす、セクトをつくる、仲間褒めとかばい合い、家父長制的な忠誠心を基準とした選別と差別.....、こんなドロドロしたものも共産党の各級の組織に無くはなかったのです。

### 編集スタッフの交替

**佐藤** 私が復職しましたら、芝の愛宕町に立派な産別会館が竣工されていました。私は玄関

で見上げて、何か誇らしい気持ちになった記憶があります。

1949年4月、私が復職した時点における産別会議の議長は、菅道（かん・まこと）さんでした。しかし、この年11月に第5回大会が開かれ、金属（全日本金属労組）出身の吉田資治（よしだ・すけはる）さんが議長に就任しています。私は、吉田さんに対して意見はありますが、産別会議の組織と運動を真摯に、土台において支えたのであり、指導者としても高く評価しているのです。

吉田資治さんは、公私のけじめをとっても大事にされたそうですね。

**佐藤** そうですよ。たとえばハガキ一枚、切手一枚についても、その使い方に正しさを求めておりました。言葉遣いも丁寧で、罵倒したり恥をかかせたりするようなことは一切なかったのです。吉田さんは近寄り難いほどの原則主義者で、何よりも組織の理念や原則を大事にされ、日本共産党の労対幹部の二人とは誰が見ても違っておりました。

私が産別会議に在職中、吉田さんのもとで『労働戦線』『労働新聞』『労働者』の編集にタッチしたわけです。情勢は厳しく、困難であったけれども、吉田さんのもとでの産別会議の時代は、私自身、それなりに情熱を燃やし、まあ後悔はしていない。

佐藤さんが復職されたとき、機関紙担当の幹事はどなたでしたか。

**佐藤** 荒賀文吉です。私が復職する前、松尾さんが退職しています。『労働戦線』の編集部はその直後、1948年11月19日、産別会議の第4回大会を機に人事異動があったようです。前任者の喜田幸二が民同側に走って除籍されたため、代わって金属出身の荒賀文吉さんが機関紙部長となったのです。

産別会議は1949年の下半期、“吉田・高原コ

ンビ”で運営されていました。高原晋一さんは全通出身の幹事で、1948年11月の第4回大会で副議長に就任しています。当時は、芦田均内閣から吉田茂内閣に代わって、反動の嵐が吹きはじめ、他方でこちらの陣営は崩され、これをどう立て直すかでみな必死だったのです。高原さんは逆風で困難な時期に、吉田さんとよく産別会議を支えたと思いますね。

荒賀文吉さんは、新聞制作について素人の方でした。たまたま幹事であったため、役員として機関紙部長を分担したのだと思います。

編集長は小俣行夫さんですか。

**佐藤** いや堀卯太郎です。堀さんの下に編集長代理という肩書で小俣行夫さんがおりました。後退期の『労働戦線』の編集は、堀卯太郎

小俣 佐藤というラインで行われたことになります。これに山口と糸井という記者と、2、3人の新聞社をクビ切られた人が手伝っておりました。

『労働戦線』の編集部は当時、堀さんをはじめ新聞人としては一流の人材をろえていたと思います。山口・糸井の二人は、長島又男さんや、プロレタリア俳人として有名な栗林（農夫）さんが発行していた『東京民報』の記者をされていた方で、『東京民報』が1948年の暮に廃刊となったのを機に、産別会議が『労働戦線』を日刊化するという企画もあって招いたとのことでした。二人は『東京民報』に入る前は、どちらかが『読売新聞』の記者で、もう一人は『東京新聞』に勤めていたらしい。『東京新聞』は当時、夕刊専門紙でした。

堀卯太郎さんとは、日本経済新聞社の堀さんですね。

**佐藤** そうです。堀さんは古い活動家で、関西の友愛会＝総同盟の活動家として出発しています。彼は、大正期の末にソ連に渡って、クートベ（東洋勤労者共産主義大学）でマルクス主義

を学んだそうです。クートベ組は、戦前では日本共産党におけるエリートなんですよ。

堀さんは全協の生みの親の一人で、1929年の4・16事件で検挙され、10年間も獄につながれた闘士です。堀さんは釈放されたのち、『日経』の前身の『中外商業新報』に活版工として潜り込み、戦後は日本経済新聞社の従業員組合の結成を指導したそうです。彼は、新聞単一（日本新聞通信放送労組）の執行委員として、戦後初期における日本の新聞労働運動をリードした方なんです。

### 日本共産党との関係

『労働戦線』は編集にあたって、日本共産党の指導を仰ぐということはあったのですか。

**松尾** いや、『労働戦線』の編集部は日本共産党の筋が一本通っていると見られていて、直接に指導を受けることはありませんでした。

産別会議は1947年7月10日、自己批判問題をめぐって第2回臨時大会を開きました。この直後に、私は新しく事務局長となった吉田資治さんから呼び出され、「『労働戦線』は思想的に固まっているから、機関紙部長が少しおかしくてもやっていかれるだろう。我慢してくれないか」と言われました。

この大会で、のちに産別民同に走った喜田幸二が機関紙部長に就任しています。要するに吉田さんが、機関紙部長の交替で『労働戦線』の編集が右に傾くことを懸念し、気をつけてくれと私に念を押ししたわけです。私は、全幅ではなかったと思うけれども、共産党の本部からは信頼の目で見られておりました。

私はいま、『労働戦線』が編集にさいして日本共産党からの指導は受けていないと言いました。けれども『労働戦線』は基本的に水曜会が決定した方針や討論を参考にして編集していた

のです。

共産党は当時、毎週水曜日に代々木の本部において単産の役員や、東京・関東の地区委員長らが集って労働組合対策を協議しておりました。いわゆるフラクション会議です。私は水曜会のメンバーの一人で、『労働戦線』は、産別会議の幹事会や執行委員会の方針というよりは、むしろ水曜会で決定された方針・方向に沿って編集していたのです。

**佐藤** 水曜会は、産別会議における各単産のフラクションに対する指導機関で、日本共産党の産別会議に対するベルトなんです。

**松尾** ……。必ずしもそうは規定できない。しかしいま考えれば、ずいぶん無茶な話なんですね。幹事会の決定や方針のみか、喜田幸二という機関紙部長の指導も無視して編集していたんですもの（笑）。

問題ですね。

**松尾** 1948年に日本でILOの会議が開かれ、世界労連のウオーディスが来日しましたが、彼はそのとき日本の労働組合運動に統一行動の思想がない、と批判していましたね。

当時、産別会議の本部の会議室に、スターリンのつばのある帽子を被った大きな写真を飾ってありました。ウオーディスが産別会議を訪ねて来たとき、スターリンの写真を指さして「われわれの組合ではこういう写真は絶対に飾らない。飾るべきではない」と言っておりました。労働組合は労働者の要求で団結する組織だ、ということが思想としても、運動としても理解されていなかったのです。

昔の全協の機関紙は『労働新聞』といいます。『労働新聞』のばあいはレーニンの顔写真を載せたりしていましたが、それと同じなんですね。われわれには戦前の思考・行動様式が戦後においても継承されていたのです。

1948年2月13日、産別会議民主化同盟が結成



いたけれども、誰かに出席しろと指示されて出ていたという記憶もないのです。

とにかく、水曜会の会合には産別会議における各単産のフラクションのメンバーを中心に、東京や関東地区の党幹部など約5、60名が出席していました。出席者は毎回4、50名ぐらいで、司会は野坂（参三）さんだったり、政治局員の長谷川浩が行うこともあり、たいてい徳球が冒頭に一席ぶってから始まるのです。

この点は、改めて申し上げておきます。さっき佐藤さんが水曜会について、産別会議のフラクションに対する指導機関だったと言われましたが、そう規定するのはいささか強引だと思いますよ。受け取る側の、すなわち参加したメンバーの意識や理解の強弱もあると思います。私は、産別会議のフラクションに対する指導機関というよりは、むしろ日本共産党における労対幹部と現場の指導的党員の情勢分析や意見交換の場、と理解しております。

会合ではどんなことが話し合われたのですか。

**松尾** 当面の情勢分析や、単産ないし大経営における労働組合の争議対策が主なものであったと思います。冒頭で野坂参三、長谷川浩、伊藤律らから日本共産党としての情勢分析や諸報告があって議事が始まるのです。次いで、各単産の重要事項や争議中の組合の動静が報告され、つづいて質疑討論が行われ、全体で方針・対策を確認する、という形でだいたい終わっていました。

さっきも言いましたが、会合には徳球が必ずといっていいほど出席し、演説をぶち、出席者の気分を高めていたのです。

2年前（1980年7月）、大原社研では、長谷川浩さんから産別会議と日本共産党との関係について3回にわたって聞き取りを行いました。とうぜん水曜会についても質問しま

したが、彼は何か不愉快そうな感じで、口が重く、詳しい証言を得ることはできませんでした。

長谷川さんからは、1946年10月闘争のさ中に各単産執行部において党員グループすなわちフラクションが結成されたこと、水曜会はこれらの単産のフラクションメンバーが中心となって構成されていた、という当たり障りのない説明で逃げられました。

**佐藤** 喜んで話す性格の事柄ではないですよ。隠微な指導だったもの…。水曜会は、私が復職したときもありました。私が復職したとき、堀卯太郎さんが『労働戦線』を代表するような形で出席していて、私も代理のような形で何回か出ました。堀さんの話では、水曜会の誕生はもっと早く、産別会議を結成する準備過程で生まれたと言っておりましたが…。

**松尾** 産別会議の10月闘争は、東芝と電産に代表されます。あるとき私が出席した会合で、電産争議について集中討議した記憶があります。そして、これを『労働戦線』の記事にした記憶もあります。これらのことから、水曜会はたぶん10月闘争のころに結成されたのかもしれない。

**佐藤** 松尾さんには不快かもしれないが、水曜会は、日本共産党が産別会議ないし労働組合組織をコントロールするベルトの機能を果たしていたのです。産別会議の執行部は、水曜会によってベルトをかけられていたのです。日本共産党と産別会議は、いろいろな形で“連結”していたのです。水曜会はその連結器の一つだったのですよ。

**松尾** 私はそうは理解していない。

### 発行部数

先に、『労働戦線』の発行部数が当初は3万部で、1946年11月に週刊での定期発行

を実施して以降、8万部で推移していたとの話がありました。発行部数が10万部を超えることはなかったのですね。

**松尾** 私の在任中はそうです。産別会議は1948年2月13日、細谷（松太）、三戸信人らが民同を結成して分裂しました。実は、この時期が『労働戦線』の発行部数が8万何千部かでピークだったと思います。

『労働戦線』は前年の11月11日付の第58号から5日刊となりました。私らはこの時点で、5日刊・10万部発行をめざしておりました。そして『労働戦線』を1948年の全通の3月闘争や、この月に芦田均内閣が成立しますが、この芦田内閣の外資導入政策や企業整備政策に反対する「紙の武器」にしようと考えておりました。けれども、むしろこの月から『労働戦線』の発行部数は下降線をたどっていったのです。

**佐藤** 1948年の2、3月の時点で、情勢は根本的に転換したのです。民同グループの脱退があり、産別会議は完全に分裂したのです。それに政令201号の公布もあり、日経連など経済団体の攻勢が顕著となりました。産別会議の運動は、全通3月闘争、東宝争議、国労のマッカーサー書簡反対闘争など表面上は華々しい闘争がありました。後退局面に入っていたのです。労働運動は分裂の時代、あるいは再編の時代に入ったのです。

実際にそうですね。

**佐藤** ええ。1948年に入ると産別会議を音頭をとって結成した新聞単一（日本新聞通信放送労組）が真っ先に脱退しました。また電工（日本電気工業労組）であれ、機器（全日本機器労組）であれ、本体の単産は残っていても、分会は離脱して民同派に移ったり、総同盟の支部となったりで、産別会議はまことに厳しい状況に追い込まれました。日本を代表する労働組合のナショナルセンターとしての産別会議の存在

は、土台が揺らいだのです。

産別会議は、1949年の11月28日の第5回定期大会のときは12単産・76万9000人でした。産別会議の組織は、結成後わずか3か年で半分以下に減少してしまったわけです。単産や単組が脱退し、組合員が急激に減少するにつれて『労働戦線』の販売も減少し、何か打開策がないだろうか、紙面にもっと大衆性を出そうと思案中に、発行部数が7万部となり、49年末には4万部を切ってしまったのです。

『労働戦線』は、1949年3月7日付の第152号より週三日刊となっていますね。

**佐藤** そうです。情勢が週三日刊を求めていると思います。1949年3月に電工の牙城だった東芝労連や、全通、国労なども分裂し、民同派が主導権を握りました。亀田東伍らの化学（全日本化学労組）も、この年に産別会議を抜けています。組織分裂で購読者が減ったけれども、『労働戦線』は民同派の策謀を伝えなければならなかったし、経済九原則下の企業整備などクビ切りの実態やそのねらいを報じなければならなかったのです。

前回、松尾さんが『労働戦線』の発行部数について、ピーク時は8万部で、駅の新聞店でも売れ、また分会がまとめて買ってくれたと話されました。私は複雑な気持ちです。

松尾さんはよい時分に退職しましたよ。松尾さんの時期は、『労働戦線』のいわば黄金時代でした。何ら苦勞することもなかったでしょう。実際、産別会議は日本の労働勢力の中心にあり、実際に『労働戦線』が期待されかつ読まれた時代でありました。

私が職場復帰したとき、『労働戦線』の発行や販売を支援・協力してくれる組合なんていやしない。当時、『労働戦線』に支局や通信員を設置していました。支局なんて有名無実でしたよ。通信員という人からの記事も届きやしな

い。

### 知識人の寄稿

**佐藤** 5日刊が3日刊となった結果、掲載する記事が足りないという事態が生じ、編集部はそのやり繰りに苦労しました。私が「主張」を書いたことが何回もありました。編集長の堀卯太郎さんも一生懸命、主張欄や解説の記事を書いておりました。編集部のメンバーだけでは手薄ですので、幹事や執行委員にも片っ端から「主張」の原稿執筆を頼みました。依頼原稿のばあい基本的に署名を入れていましたので、誰が書いたのかすぐわかります。

けれども彼らの原稿は、期日に間に合わなかったり、受けとって内容の手直しでむしろ時間がかかったり、私はイライラのし通しでした。

この点、学者・知識人など先生方の原稿はア力を入れずに、そのまま入稿できたのです。談話を速記で起こしますと、話している内容が理路整然としており、そのまま原稿として入稿できました。週三日刊ですから、ストックの原稿はすぐ底をつきます。私らは早め早めに、学者の方に原稿執筆の件で協力をお願いしておりました。

たとえば、どのような方に原稿をお願いしましたか。

**佐藤** ……。大山(郁夫)先生や、羽仁五郎、堀真琴、平野義太郎、木村禧八郎、鈴木東民さんなどの名前が思い浮かびます。

この時期、『労働戦線』は写真を多用し、社会・文化欄を充実させ、また談話や声明書の発表なども掲載して大衆化に努めました。こういうのもヘンですが、紙面は、松尾さんが編集人のときよりも面白く読めるように工夫されていたと思いますよ。

**松尾** 時期、状況が違いますもの。全国大会

の記事や決議・報告だけで編集し、それが飛ぶように売れる状況ではないでしょう。

稿料は払っていたのですか。

**佐藤** 薄謝ですがきちんと払っていました。激しいインフレのなか、学者であれ漫画家であれ、みな必死に生活していました。タダで済ますというわけにもいかないだろう。談話の場合、謝礼は払っていませんでした。

### 『労働戦線』の漫画

1973(昭和48)年8月、労働旬報社が『労働戦線』の復刻版を出しました。僕はそのさい記事索引の作成を手伝いましたけれども、記事とりをしながら労働漫画、風刺漫画をよく眺めていました。『労働戦線』の漫画はじつに面白い。

**松尾** 鈴木賢二さんの漫画はとくに評判が良かったのです。産別会議の専属漫画家みたいな形で、最初のうちはもっぱら彼が描いていました。鈴木さんの漫画が面白いとあって、新聞を購読する組合員もいたのです。

ほかに『労働戦線』に発表してくれた漫画家として、片寄貢、杉浦茂、松井公太郎さんなどがおりました。

創刊当初、労働漫画が第一面の題字下や真ん中に位置していて、かなり重視しているのがわかりますね。

**松尾** 娯楽などがなかった当時、漫画や写真は娯楽的な意味合いをもって歓迎されていたのかもしれない。写真といえば、あのころ『サン写真新聞』も出ていましたね。

労働組合の機関紙はどちらかといえば堅苦しい。私は裏表二頁建てという狭い紙面のなかにも漫画、写真、挿絵、労働詩などを盛り込み、労働生活のなかに潤いを感じられ、かつ楽しく読み易い新聞にしようと心掛けました。

**佐藤** 私自身、紙面づくりで労働漫画をとく

に重視したという記憶はないのです。ただ、当時駆け出しの漫画家だったと思いますが、加藤悦郎さんや宮下森さんに薄謝で申し訳無いといながらお願いしたことがありました。加藤さんはもとは左翼だったのですよ。

『労働戦線』に発表された漫画だけ集めて出版すれば、戦後日本の労働組合運動を別の側面から照射・分析することになります。売れるでしょうね。

**佐藤** 売れるかもしれない。面白いアイデアですね。顧みて、私らの編集上の努力や工夫はほとんど報われなかった気がします。発行・販売部数が低下し、未収金がかさみ、不安と苦悩の毎日でした。私自身、販売について分会の責任者と連絡をとって、血が滲むような努力を行っても、2部とか3部を買ってもらうのがせいぜいだったのです。そんな努力をあざ笑うかのように購読者に分会あて新聞を送っても、東芝、全通、電産の分会などからは、受取人不在で帯封のまま返されて来るようになりました。

当時、私は購読料の未収金を棒グラフでつけていました。未収金が月ごとにグングンと高くなっていくのです。1949年の秋、『労働戦線』は事実上、経営面で立ち行かなくなっておりまして。私も頑張ったのですけれども、編集長の堀卯太郎さんも小俣行夫さんも、減紙や経営難の打開で日夜苦悩していたのです。

### 日刊化の構想

**佐藤** こうしたなかでも、産別会議は『労働戦線』の日刊化をめざしました。これは成り立つ企画ではなかったのです。けれども日刊化は無謀とか高望みとか、そういう次元のものではなく、産別会議がその存続をかけても行わなければならぬ企画と位置づけておりました。『労働戦線』の日刊化は、機関紙部長の荒賀文吉さんが立案し、1949年7月の幹事会で正式にこれ

を決定しています。

この『労働戦線』日刊化の構想は、現場サイドからの企画ではなく、幹事会の判断でなされ、ある意味では下り坂にさしかかった産別会議のあがきのような企画でした。

産別会議に対する弾圧は、第3次吉田茂内閣が成立して以降、大胆に開始され、4月に団体等規正令が、翌5月に国鉄や全通の労働者をクビ切りのための行政機関職員定員法が公布されています。そして7月に下山事件と三鷹事件が、8月には松川事件が起きました。

政府や警察は、これらの事件が国鉄労働者や東芝の労働者が起こしたかのような世論工作を行い、商業メディアもこれを受けてデマと偏見に満ちた報道を行っていました。増田（甲子七）官房長官が三鷹事件と松川事件について、共産党員が起こした計画的犯行とする記者会見まで行っていたのです。

『労働戦線』の日刊化は、これらの事件の真相を究明し、悪質なデマに反駁して真実を即時かつ適切に伝えるため企画されたものだったのです。幹事会の構想は1949年9月1日から週2日刊を実現し、10月より完全な日刊新聞にする、というのが大体的な内容でした。

しかし、『労働戦線』の日刊化は実現していませんね。

**佐藤** ええ。私らは、日刊化へ向けた準備として機関紙印刷所を設立し、また紙代前納制や支局の拡充を図ったり、編集部の態勢も整えました。けれども日刊化への移行直前の9月25日、幹事会は「『労働戦線』を全労働者の新聞にするため日刊化を延期する」という珍妙な理由でとり止めにしたのです。

『労働戦線』の日刊化に対して、日本共産党が難色を示していたことは、産別会議の細胞を通じて私も承知しておりました。理由は、『労働戦線』と『アカハタ』が競合し、『アカハタ』

が喰われてしまうということでした。

いずれにせよ、『労働戦線』の日刊化は直前になって取り止めとなり、準備の先頭に立っていた荒賀文吉さんが激怒し、その怒りを私らにぶつけておりました。

編集長の堀卯太郎さんは日刊化の準備の過程で、海運関係の業界紙を発行するということが突然退職され、労働運動とも縁を切りました。海運業界は、間もなく朝鮮戦争の勃発で空前の特需景気を迎えます。食わなければならないとはいえ、クートベ組の転身に私はほんとうに驚きました。

### 『労働新聞』となる

『労働戦線』は、1950年6月2日付の第279号より『労働新聞』と改題しています。これは、『労働戦線』が全労連（全国労働組合連絡協議会）の機関紙に移行したということですね。

**佐藤** そうです。朝鮮戦争の直前、1950年4月17日に産別会議が全労連の強化・発展の方針を打ち出しました。この方針は、劣勢に追い込まれた産別会議が民同派による総評結成の直前に組織の建て直しをはかり、全労連のなかにその存続をめざしたもので、金属（全日本金属労組）の提案で決まったものです。この結果、『労働戦線』を全労連の機関紙として提供することになり、『労働新聞』と改題のうえ、バックナンバーを継承して発行をつづけることになったのです。

全労連を強化するという路線は、総評に対抗するねらいが込められていたのですね。

**佐藤** そうだと思います。のちに産別会議は総評への“なだれ込み”を決めています。私は産別会議がなぜ組織と活動の機能を全労連に移したのか、当ても疑問をもちましたが、いまま

疑問に思っています。流れは、現状のままでは産別会議の組織がもたないので、何らかの形で産別会議の理念や影響力を確保したい、という判断があったのでしょうか。

産別会議は名目上、残りました。芝の産別会館が全労連会館となり、私の身分は『労働新聞』の編集部員となっただけで、仕事は何も変わっていない。『労働新聞』の編集・発行人も、機関紙部長の荒賀文吉さんがなっています。

『労働戦線』の題字はどなたが付けたのですか。

**佐藤** 金子健太さんらオールド・ガードが提唱して決まったのです。金子さんは機械工で、日本共産党が創立した1922年から黨員だったらしい。彼は、私の故郷の岡山県に共産党組織をつくりあげた人です。また評議会の結成や全協の結成を指導され、全協の『労働新聞』の編集長をされています。だから、かつて自分たちがつくり、守ってきた昔の新聞への執着、いや執念のようなものがあつたと思います。

『労働新聞』へ移行したことで、編集方針などに変更がありましたか。

**佐藤** ない。まったく『労働戦線』のときと同じです。記事として全労連の決定や加盟団体の活動に関するものが多くなったこと、中国・アジアをはじめ国際関係の記事が多くなったことぐらいでしょう。

『労働新聞』で多少留意した点をあげると、これまでの「主張」を「われらの言葉」として政治・情勢分析を試み、反米闘争の路線や反戦・平和擁護を基調とする内容にするように努めていたぐらいです。6月25日、朝鮮戦争が始まりました。『労働新聞』は、いま読んでみてもかなり激しく「帝国主義戦争反対」「アメリカの干渉反対」のキャンペーンを行っていますね。

『労働新聞』の時代に、こういうことがあり

ました。朝鮮戦争が始まって、日本のマスコミでは戦争を仕掛けたのは北側で、韓国側がこれに応戦したという報道がなされました。編集委員会でも報道の正確を期すため、朝鮮戦争をどう見るべきか、どちらが先に手を出したのか、ということが問題になりました。私らの見解は、北朝鮮が手を出すはずがない。これは、帝国主義戦争なのだから韓国側が仕掛けたのだろう、ということになったのです。

歴史事実としては、北朝鮮側が中華人民共和国とはかって戦争を起こしたのです。論争は決着がついています。

**佐藤** 当時は、判断する材料がなかったのです。『労働新聞』の編集では、代々木（日本共産党）から毎日、お目付役が出勤して紙面をチェックしていました。その彼が編集会議に出て、「これは帝国主義の侵略戦争で、どちらが先に手を出したかは問題でない。われわれは朝鮮戦争を帝国主義戦争として把握することが重要で、先に手を出したのが南でも北でもどちらでもよいことだ」と言うのです。私は、これはどういう観点なのか、このような観点を大衆はどう理解するだろうか、と疑問をもったことがありました。

**松尾** なるほど『労働新聞』は「帝国主義戦争絶対反対」とどでかい見出しをつけていましたね。私は、これじゃ弾圧を食うぞと心配していました。

**佐藤** いまの話は、第288号（1950年7月3日）の題字と並んで掲げられたスローガンのことでしょう。この号では「帝国主義戦争の陰謀を砕け」となっています。

『労働新聞』が、帝国主義戦争反対のキャンペーンを果敢にはったことは評価されてよいと思う。朝鮮戦争が始まった翌日、マッカーサーが『アカハタ』に対して発行停止を命令しました。共産党の中央委員もみな公職追放され、民

主勢力が後退を余儀なくされるなかで、『労働新聞』は毎号、朝鮮戦争反対・即時中止で論陣をはりました。

けれども全労連に対する弾圧や『労働新聞』の廃刊は、朝鮮戦争反対のキャンペーンの結果によるものではないと思います。1950年8月30日、全労連は法務府より解散を命じられました。これより先、全労連の幹事会が『アカハタ』の発行停止を受けて対応を協議し、「死守せよ！言論の自由」という檄を決め、これを『労働戦線』で大々的に発表しました。これも、同じ第288号に発表されています。これが非常に激しいアピールで、「ああ、やられるな」と思っていたら案の定やられたのです。

#### 荒賀文吉について

**佐藤** 『労働新聞』と『労働者』のときは、毎日緊迫した情勢のなかでの編集で、よく発行がつづいたと思います。1950年6月26日、マッカーサーが『アカハタ』の発行停止を指令し、これを機に日本共産党が非公然の活動に入りました。

全労連に対しては7月13日夜、警視庁が全労連の本部や『労働新聞』の編集部、機関紙印刷所を団体等規制令違反の容疑で捜索し、関係資料を押収しました。このとき荒賀文吉さんが自宅で逮捕されています。

捜索や検挙のばあい通常は明け方なんです。ところがこのときは夜の10時で、私らは虚を突かれました。そして『労働新聞』は7月24日、法務府より無期限の発行停止処分を受けました。だから、『労働戦線』を継承した『労働新聞』は、1950年6月2日付の第279号から7月24日付の第293号まで15回しか発行されていない。

『労働者』について紹介する前に、ここで荒賀文吉さんの裁判について紹介しておきたいの

ですが。

どうぞ。

**佐藤** 荒賀さんは、警視庁で開廷された占領軍の軍法会議にかけられました。その軍法会議に、私は検事側の証人として出廷しています。どう証言するかは、事前に産別会議の幹事会と打ち合わせ、『労働新聞』の編集・発行は名義上も、実質的にも荒賀文吉個人に責任があり、産別会議の他の役員はいっさい関係ない、という内容で証言することになりました。党がどういうルートで手回しをしたのか、アメリカ人の検事もこの内容での証言を事前に了承している、とのことでした。

要するに罪人には荒賀さん一人になってもらい、吉田資治さんら産別会議や全労連の上級幹部に及ぶことを避ける、というのが組織の方針でした。このことを私に代弁させたのです。私は日本共産党員です。また全労連の幹事会のもとに仕事をしているわけで、組織の命令は絶対ですから、私はその通りに証言しました。

荒賀さんは、軍法会議の結果、プレス・コード違反ということで即決で有罪となりました。彼は、その日のうちに東京拘置所に移送されています。

のちに荒賀さんは1年半ほどの期間、甲府刑務所で服役します。荒賀さんが東京拘置所に移送されるとき、私は警視庁の地下玄関で彼を見送りました。彼の態度に悪びれたところはまったくなく、堂々として立派でした。

何かの本で読んだのですが、荒賀文吉さんは、1926（大正15）年4月における浜松楽器争議の指導者の一人だったそうですね。

**佐藤** はい。荒賀さんは、生粋の労働者出身の労働運動家で、残念ですが現在では忘れ去られてしまっている。彼は大正期からの運動家で、左派の評議会＝全協系におりました。同じ労働者でも、エリート組といわれた堀（卯太郎）さ

んとは精神がちがう。

荒賀さんは、浜松楽器争議のときの“煙突男”として有名です。彼は日本労働運動史上、最初の“煙突男”です。荒賀さんは文才があり、鋭さだけでなく、味わいのある文章を書き、名前だけの機関紙部長ではなかったのです。

荒賀さんは甲府刑務所でも頑張ったようなんです。待遇改善や“囚人”に対する不当な扱いで刑務官に抗議してあばれ、それで足鎖や手錠をはめられたらしい。私は最近、荒賀さんについて夏の暑い日、あるいは床の中でふと彼の顔が浮かんだり、思い出すことがあります。私は、荒賀さんの消息について知らない。彼は現在も元気でしょうか…。

調べてご報告します。

**佐藤** お願いいたします。

### 『労働者』の発行

『労働新聞』は、1950年7月24日付の第293号をもって終刊となっています。『労働戦線』を継承する形での『労働新聞』は、わずか12号の発行です。このあと8月25日、全労連の機関紙は全日本金属労組の機関紙『金属戦線』を『労働者』と改題して発行されていますね。

**佐藤** そうです。『労働者』は、『金属戦線』のバックナンバーを継承する形で、週2回刊で発行されています。『労働者』が全労連の機関紙となった経緯は、1950年8月21日付の『金属戦線』の第89号（復刻版『産別会議／全労連機関紙』に収録）で述べられています。

全労連は左派陣営の拠点でした。全労連の中核は、『労働新聞』が発行停止となったもとで、とにかく機関紙は何としてでも確保したいという判断でした。地下活動に入った日本共産党も同じです。そして、全労連の主体であった全日本金属労組がこの役割をになうということにな

り、『労働新聞』が再刊されるまでの過渡的な措置、という位置づけで『金属戦線』を提供したのです。

ところが8月30日、全労連が法務府より解散命令を受けました。この時点で『労働者』は、厳密に言えば全労連の機関紙ではなくなったわけですから、『労働者』の最初の第90号と91号のみ、発行機関について全労連と全日本金属労組を併記し、それ以降は金属労組となっています。

**松尾** 『労働者』は、全労連が解散しても事実上、産別会議の機関紙という位置づけで発行していたのですよね。

**佐藤** そうです。『労働者』は、産別会議に加盟する単産より委員を出してもらい、編集委員会を設置し、共同編集という形で発行していました。その編集委員会も全労連会館、すなわち産別会館の一階に置かれ、編集スタッフも『労働新聞』のときと何ら変わっていない。

なお、編集発行人は最初、当時の『金属戦線』の責任者だった篠田彦がそのまま就いています。のちに共同編集の体制が確立して以降、『労働者』のウラの実質的な責任者は、産別会議の化学のもと委員長だった亀田東伍が日本共産党から押されて就任しました。編集発行の名義人は、金属の吉田明（のち大竹喜代四）が就任し、吉田は財政の責任者も兼ねていたと記憶しています。

編集スタッフは何名でしたか。

**佐藤** 『労働者』の終わりごろの編集実務は、私と都留（ペンネームは鳥井）の二人でした。私は「高田」というペンネームで取材を行い、記事を書いていたと思います。このほか、スタッフとして整理の記者とカメラマンがおりました。

私自身、『労働者』の編集では、レッドパーズ闘争と全愛協（全面講和愛国運動協議会）の

運動を重視して報道したことが記憶に残っています。

たとえばレッドパーズ闘争では、私は、三菱下丸子（三菱重工業東京機器製作所下丸子工場）の例を取材しました。三菱下丸子では、産別会議の幹事だった山崎良一をはじめ共産党員が根こそぎ首切れられ、撤回要求の闘争を行っていました。彼らは工場の表門を閉め、工場側と団交を重ねていて、そこに神奈川県警の警官隊が襲撃して、さながら市街戦のような闘争となっていたのです。警官隊に追われた組合員が工場から逃れ、田んぼを駆けめぐっての映画もどきの大活劇だったのです。

この三菱下丸子におけるレッドパーズの撤回闘争については、私自身、『労働者』の第108号（1950年10月27日）をはじめ、何回にもわたって子細に紹介しました。

全愛協の全面講和を要求する平和投票の運動や、ロンドンでの世界平和大会の開催に向けて日本でも取り組まれた、平和擁護日本委員会の平和擁護運動についても、私が中心になって取材しこれを記事にしました。

### 『労働者』の廃刊

**佐藤** 『労働者』は、1951年5月21日付の第151号で廃刊となりました。だいぶ時間が経ちましたので、これを述べて終わりにします。

『労働者』の共同編集委員会に警視庁の捜索が入ったのは、1951年5月24日の午前6時のことでした。警視庁が団規令違反の容疑で編集委員会を手入れするという情報は、前日のうちある筋から連絡が入りました。

『労働者』の実際の責任者は亀田東伍です。亀田は「今夜の宿直は君がやってくれ。私は党の大事な任務があるから、ここにはまづい」と言い、逃げるようにどこかに消えてしまったのです。

24日朝、情報どおりに警官隊が産別会館に踏み込んで来ました。警官隊は、私に立ち会いを求めて庶務簿、編集ノート、編集資料、新聞綴じ込みなど手当たり次第に押収してゆきました。私らは、重要書類は昨夜のうち他に移し、あるいは処分したため被害は最小限に食い止めることができました。

編集関係では当日朝、大竹喜代二と吉田明が自宅で検挙されています。亀田は逮捕されていない。そして、この日の午後、法務府は『労働者』を『アカハタ』後継紙とみなして発行停止を命令したのです。1946年8月20日、『労働戦線』の創刊をもって始まった産別会議・全労連の機関紙活動は、ここに幕を閉じました。

以上が、『労働新聞』から『労働者』の廃刊にいたるまでの経過・経緯のあらましです。

私事に及びますが、私は『労働者』の発行停止によって失業し、数か月後に『医療民主新聞』に職を得ました。この『医療民主新聞』は、じつは『アカハタ』後継紙の一つで、民主診療所の医師を対象にした新聞ということで発行が認められていました。発行責任者は朝倉という人で、編集に三好博がいました。その『医療民主新聞』も間もなく潰れました。私は、こんどは『人権民報』という新聞社に記者として入り、メーデー事件などを中心に、日本共産党が半非合法であった時期の民主運動について記録し報道しました。

『人権民報』は、日本国民救援会が出していた新聞ですか。

**佐藤** いや、人権民報社という日本新聞協会の分類でいえば種、いわゆる特種新聞社が発

行していた新聞です。日本国民救援会も一枚からんでいた左翼新聞の一つで、前身は『全法協タイムス』といい、林武雄、東城守一さんらかつて産別会議の法対部に属していた自由法曹団の弁護士が中心となっていました。

私が入社したとき『人権民報』の編集発行人は勝原士郎さんで、のち鳥居雄次さんに代わっています。

『人権民報』では、私はもっぱらメーデー事件、鹿地亘事件、松川事件などを取材・報道しました。この時期、私は経済的にはどん底を強いられましたけれども、思想的には高揚と躍動の時期だったと思っています。

私は、戦前は『中国民報』（現在の『山陽新聞』）の記者でした。だから水を得た魚のように縦横に飛び回り、書きまくりました。人権民報社が編集綱領に「真実を伝えるための報道」を掲げていたこともとても気にいっていたのです。

けれども六全協（1955年7月）前の、日本共産党が半非合法・武装闘争に入っていた時期の民主新聞の編集・発行は、さまざま制約があり、かつ厳しく、困難の連続でした。私は、不眠不休の取材活動がつづいたこともあって、メーデー事件の裁判の取材中、結核が再発し、結局退職しました。そして、病氣回復したのち1961年にタス通信社東京支局、67年にノーボスチ通信東京支社勤務をへて、ソ連大使館の広報部に勤務し、先年（1979年2月）に退職し現在にいらっています。

何回にもわたったの証言、有り難うございました。（完）